

「信頼関係」にあると考えたからである。第1章は「歯科医師自身の基本姿勢」として、歯科医師は患者の生命や人生を尊重した歯科医療を提供する倫理観を示している。第2章の「患者を尊重した歯科医療」では、患者との信頼関係の構築のために生命倫理を基本とした歯科医療を示している。第3章の「歯科医師としての社会的責任」で

は、患者の秘密保持、法や倫理の遵守など歯科医師の責務を説いている。第4章の「歯科医師の倫理」では、「日本歯科医師会倫理規範」、「歯科医師の倫理綱領」、「歯科医師の基本的倫理」を具体的に示している。最後には、倫理に関する国際宣言、綱領などの解説が述べられている。

(平成20年12月例会)

馬醫の祖“伯楽”と“伯楽鍼経”の展開

亀谷 勉

はじめに

私たちが馬醫の祖と考えている“伯楽”と称された人々のこと。また、それらの人々によって作成されたとされる“伯楽鍼経”が、その後、どのように展開していったかにつき、関連事項を含め述べる。

馬・醫・獸の字源

馬という漢字は、字形は象形字で、字音のバは、たてがみ“鬣”パウに由来し、字義はたてがみ“鬣”をもつ動物のことで、メ、マとも呼ばれる。獸という字は、野性のけだものや、道義をわきまえぬことを連想させるが、左の兽(キュウ)は、胎生動物を意味し後には畜となったとされる。この獸の語義は囲いの中の動物を、犬が守護するとの意である。また、醫という字は、澄んでいる酒の意。古代は薬の補助として清酒を使った。「くすし」とも呼んだ。本字は醫であって巫が祈祷によって病気を治したが、薬を使うようになって醫の字が用いられるようになったとされる。

“獸醫” Veterinary

ラテン語の Veterinarius に由来し、ドイツ語を除く欧米各国ではほぼ同一の文字が使用され、ギリシャ語の“荷役家畜”“古い”が語源とされる。その他の国では“動物”に“医師”の合成文字で表示されることが多い。

古代における動物医療の史料

BC2500頃エジプト壁画に雌牛の助産図が、また、“周禮”(BC1000頃)には獣医の記述がある。BC600頃には“伯楽(孫陽)”の存在や、推古天皇の時代(595年)には、高麗から僧により馬療術が伝え(日本書紀)られたり、律令(718年)に馬医の官位令や平仲国の唐での馬医術習得の記述(804年)がみられる。

また、文永4年(1267)の「馬医草紙」には伯楽、大汝(オオナムチ)、王良、神農、黄帝、造父など、馬医と関係深い名が記述されている。

伯楽と伯楽鍼経

孫陽は、中国の秦の穆公(BC569-621)の頃の著名な馬医・相馬の専門家で、伯楽と呼ばれ、天馬を司る星としても記述されている。中国の“星座伯楽”は、明日香村のキトラ古墳の天文図の中に“造父”として描かれていたことは感銘深い。

伯楽鍼経は、618-833年間に作成され、馬の各種疾病に対する適応穴位の針刺法が詳細に記述されている、中国に現存する最古の獣医専門書であり、しかも、世界で現存する最古の獣医針灸の文献でもある。この書は世界の獣医針灸ならびに畜牧業の発展や貢献に極めて大きな影響を与えた。

中・近世における馬医療の史料

この世代に『司牧療馬安驥集』『元亨療馬集』

ならびに韓籍馬医書『新編集成馬医方・牛医方』などが導入・和訳され、わが国の馬医学にとって最高次の専門書として刊行された。また、享保年間（1730年頃）には、西洋馬術やオランダ馬医書が紹介され、さらに、菊池東水による『解馬新書』の刊行もその後の馬医療の展開に果たした役割が指摘される。

伯楽鍼経の展開

徳川末期には、各藩に馬医の記述があり、それらの馬医は、“伯楽鍼経”を主な治療技術として伝承し、明治に至るまでのわが国獣医学の基礎技術であったと推察される。しかるに、明治以降（1868）、西洋医学重視の方針から、新獣医教育学制が発足し、鍼灸治療は獣医学教育の対象から全く疎外視されて、近年に至った。

1949年（昭和24）、中国は新政府を樹立後、伝統的鍼灸技術を新たに見直す展開をみせ、世界各国に“針ブーム”をもたらし、わが国においても全国的な関心の高まりの中、獣医鍼灸学研究会を設立し、鍼灸理論の解明、臨床応用、会報の発行等の活動を開始した。

獣医鍼灸学の課題と未来

(1) 医学体系の相違と理解 鍼灸学は陰陽五行説を基本理論としていて、西洋医学との相違をいかに理解し合えるか。(2) 家畜経穴名の統一 中国音声命名方、経脈番号法、原名翻訳命名法、部位別連番法、置換法などがあるが、人体と各動物の解剖学上の相違、穴位名の由来と意味を数字化できるか。(3) 獣医教育制度、国家試験への出題、家畜共催診療点数、専門医制度等々。(4) 中国および欧米諸国との共同学術研究、鍼灸の臨床効果に対する客観的評価法。(5) 鍼灸の安全性。(6) 動物の権利 (ANIMAL RIGHTS) の視点からの配慮。(7) 獣医鍼灸の国際化 現在鍼灸についての研究と応用は、世界120余国におよび、国内で組織化されている国は、15カ国である。症例報告、論文などの国際化が要望される。(8) 自然環境医学との調和 森林浴、日光浴、温泉浴、指圧、薬草などとの併用。(9) 各種療法との併用 Laser, Computer, biohologram, TDP, Trigger point 鍼療法、光灸 (Star-Beam) などとの併用等々、未来への課題も多い。

(平成20年12月例会)

マリー・キュリー夫人と放射能研究に殉じた 最初の日本人研究者・山田延男

——日仏修好150周年に因んで——

山田 光男

筆者の父、山田延男（1896～1927・以下山田）は日本人として初めてラジウム研究所に留学し、マリー・キュリー所長の指導を受けて2年余の放射能研究に従事したが、帰国後まもなく病に倒れ、31歳の若さで夭折した。当時、筆者は3歳で父についての記憶は全くなく看護にあたった母から、父の死は原因不明の奇病による聞かされた。

1993年（H5）にドイツで国際薬史学会が開催された機会にワルツブルグ大学のレントゲン記念

館を見学する機会があり、このX線発見の翌1896年にフランスの物理学者ベクレルがウラン化合物の放射能を発見したことに気づいた。帰国後、日本ではラジウム発見100周年を関連学会が準備中だったので、これへの参加を目標に山田の個人史検索に着手した。

山田の履歴

1896年生、台湾総督府中学、東京高等工業学